
(習作) 古き良き 6 4

爪切りばさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（習作）古き良き64

【Nコード】

N9903X

【作者名】

爪切りばさみ

【あらすじ】

2000字を目指していたけど3000字を超えた。
嬉しい。

あと、戦闘描写の練習。

(前書き)

あれ？これって二次創作になるのかな？

ちよつとよくわからないので、二次だという方はご連絡ください。
修正いたします。

誤字などございましたらご連絡くださると嬉しいです。

剣を振りかぶり敵を斬る。

が、敵もさるもので俺と全く同じ動作で斬りかかり、互いの剣が空中で火花を散らすに終わる。

ほんの僅かなタメ——ほんのコンマ何秒の——を作り俺の技を繰り出す。

「ハアッ!!」

だが、敵を切り裂くと予想していた俺の剣を敵はバク転をしながら見事に避けてしまった。

正直に言おう。俺は目を疑った。この技——回転斬り——は使い勝手は多少悪いもののまず、初見では避けられない技のはずだった。ましてや、あんなアクロバティックな動きで避けられるなどと誰が想像しようか。

「チッ」

小さく舌打ちをしつつ、すぐさまに斬りかかる。

その見切りは見事だが、だがその油断ともとれるスキを見逃すつもりはない。

「ハアッ!!」

今度はさすがに敵も避けきれなかったようで、うめき声をもらしつつ、水中に落ちていく。

少し、寒気がした。あまりにも予想外な行動をとる敵に。

まだ、倒したという手ごたえはない。だが、姿を消した敵。

つまり、敵はどこからかは分からないが、俺をまだ狙っているはずだ。

あたりを見渡しても、姿は見えない。

この、遠近感が無くなりそうな床一面に水が張られた世界の中、無音の緊張が俺を圧迫する。

耳を澄まし、目を凝らし、自分が持つ全ての感覚を持って、敵の気配を探る。

ーパシヤパシヤッ

後方からのかすかな水の跳ねる音に、すぐに振り向く。

いた。後方の遙か遠く。

敵は先ほどダメージを負ったはずなのに、まるでそんなことはなかったかのように、こちらに向かって走ってくる。

あるいは、先ほどの敵と姿かたちは全く同一の別個体なのか。疑問が頭の中を巡る。

「ッ!!」

気がつけば敵は先ほどの距離から半分ほどのところにいた。

俺は、何を考えていたのか。油断するところだった。

敵は剣の技量はほぼ同格。見のこなしに至っては向こうのほうが格上だ。

先程はアイツの隙をついたがそう何度も出来るとは思えない。

気を引き締めろ。目の前の敵に集中しろ。
頭を振りしぼって敵の隙をつけ。

今までは頭を振りしぼらなければ倒せない敵ばかりだった。
だが、確信がある。コイツは俺の剣士としての技量でもってでしか倒せない。

今までのように、どうすれば倒せるかなどと考えていたら、あっという間にこちらが殺されてしまうだろう。

「フッ」

鋭く息をつき、こちらも敵に向かって走る。
敵は目前だ。

盾を構え、剣を鋭く突きだす。

「ッ！！！」

さすがに息をのみ、一瞬茫然とした。

敵は、まるで突きを予測でもしていたかのように、俺の剣の上に飛び乗ったのだ。

見降ろす敵と目が合った。

敵は文字通り全身が真っ黒で、半分透けている。

もちろん、顔も黒い半透明で、本来あるはずの瞳の黒と白も見わけがつかない。

だが、間違えなく俺とアイツの目は合った。

俺の剣の上に立ち、俺を見降ろす敵の目はあまりに空虚で不気味

だった。

――ゾワリ

と、俺の背筋に寒気が走る。

その感覚から一刻でも早く逃れたい衝動に駆られ、無理やり剣を手前に引きもどす。

敵はバク転をしながら、俺はバックステップをしてお互いに距離をとる。

危なかった。今のは本当にヤバかった。

あのまま茫然としていたら今頃、確実に俺の首は切り落とされていた。

敵との一瞬のにらみ合い。

敵は何を考えているのか。その視線からは何も感じ取れない。

同時に駆け出す。

もう、さっきのような突きはしない。

「ハアッ!!」

互いの剣が空中でぶつかり合い。火花を散らす。

一合。二合。三合。

俺と、色以外は全く同じ姿かたちをしている敵は、俺と全く同じ剣の軌跡で剣を振るう。

だが、その剣速、あるいは一撃に込められた力に僅かな差があったのだろう。

俺は根負けし、剣を一瞬上に弾かれる。
その一瞬を敵は見逃さなかった。

「ウッ」

身体を物が通る感触。次の瞬間に痛みが身体を襲う。
だが、ここで身体を硬直させるわけにはいかない。
俺もダメージを負ったが、敵は剣を振り切っていて絶好の隙を見せている。

見逃すな。動け。敵を斬れ。

「ハアッ!!!」

ひと際、大きく声を上げ敵に斬りかかる。
さすがに、剣を振り切った状態での回避は難しいのか、あるいは斬られた直後に、俺が斬りかかり返すことを予測していなかったのか。

敵は全くの回避をせずに、俺に斬られうめき声をもらしつつ、水中に落ちて行った。

「Look!!」

「!」

俺の妖精ナビィが敵の場所を教えてくれた。
今度は、真後ろ。すぐそこだ。今度は俺に息をつかせないようにする算段だろうか。

敵の思惑が図れない。

だが、このまま後ろを振り返って剣を振りかぶってからでは遅い。その前に俺は斬られてしまう。

一瞬の判断の後、身体にほんの僅かなタメを作って

「ハアッ!!」

回転斬りを繰り出した。

案の定、敵はバク転をしながら剣を避ける。だが、その間に俺はいつ振りかかれても大丈夫なように相対をする。

またも、にらみ合い。無音の緊張が辺りを包む。

先ほどの動作で気付いたことがある。

敵の体力はもうほんの僅かだ。だから、俺への攻撃より自分の回避を優先した。

今までいくつもの戦いを経てきた俺の直感がそうささやく。

ならば、先手必勝。こちらから斬りかかり、その勝機を確実に俺のものとしてやる。

今度は、こちらから駆け出した。

敵の動きは最初の頃からと全く変わらないが、そんなはずはない。体力がないのなら身体は重く、疲れも相当なはずだ。俺に分からないようにしてあるだけ。

恐れるな。気持ちで負けるな。俺が優勢だ。

そう、自分を鼓舞して斬りかかる。

「ハアッ!!」

ぶつかり合う互いの剣。そして始まる剣の舞踏。

もう、分かっている。こいつは俺自身だ。

いや、このダンジョンが考えた俺のコピー。おそらくこの床が水で張られた大部屋の試練は、己に打ち勝てということだろう。

なら、負けるわけにはいかない。今まで色々な敵と戦ってきたがその都度、俺は成長してきた。

その成長の結果が、この程度だところこのダンジョンが考えているのなら、そんなことはない、俺はその遥か上を行くのだと、証明してやる。

先ほどより、剣速も一撃に込めた力も増したことで俺たちは完全に拮抗していた。

終わらぬ剣戟。

そんな言葉が頭をよぎる。

だが、ここで立ち止まっているわけにはいかない。俺は先に進まなくてはいけない。

悪いがこの戦いもそろそろ終局だ。

突然、バックステップをして後方に避ける。互いの剣がぶつかることを想定していたのか、俺の突然の行動に敵はついてこれず、剣を振り切ってしまう。

それは大きな隙だった。

剣士としての本能が囁く。

ここで、お前を倒す。

「ハアッ！！！！！！」

すかさず、飛びかかりながら斬りつける。もう、敵は回避の行動をとろうとしている。

凄まじい俊敏さだ。信じられない。

だが、この機会を逃すわけにはいかない。

剣を出来る限り速く、

そして力を込め、

ギリギリまで腕を延ばし、

――振り切った。

これを外していたら俺はどうしようもない隙を敵に見せていただろう。

だが、かくして俺の剣は敵に届き、

「ウオオオアアアアッツッ!!!」

敵は、断末魔の叫び声を上げつつ消えて行った。

――sideプレイヤー

「ふう・・・」

一つ息をつく。ダークリンク、さすがに強かった。
緊張感のある良い戦いだった。また戦いたいから、クリアしたら
もう一周しようかな。

コントローラーのスティックを動かしつつ、ダークリンクが落と
した青ルビーを取り、檻が外れた扉に向かう。

さて、ここのボスはどんな敵なのか。どのような倒すのか、知恵
の絞りがあるといいな。

それは、秋晴れの休日。

晴れているのに外で遊ばずゲームをしていた、ある少年のある一
日の風景。

少年よ。目を悪くする前に、外で遊びなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9903x/>

（習作）古き良き64

2011年11月15日10時07分発行